

幼児における一語発話の獲得について —1歳10ヶ月から2歳0ヶ月児の3人の幼児による観察報告*

但馬 香里^{*1}

A Study of the Child Language Acquisition: On the Use of One-Word Utterances among three Japanese Children

Kaori Tajima^{*1}

Abstract: This study will examine the primary acquisition of one-word utterances in one and two-year-old Japanese children. It is assumed that the children acquire languages from two points: 1) they first acquire nouns because the nouns will show the core meaning of the utterance. 2) The contents of the words are mostly concerned about the food because the appetite is one of the most primitive desires of human beings.

From our data, children relied on nouns as one-word utterances in their conversation. Moreover, we found that children had rich variety of nouns about playing things. It shows that play will also be one of the primitive and the most important things and more complex things than eating something in their lives. We also found that adults and surroundings have much effect on children's primary one-word utterances, however, children also develop their own grammar through the growth of their cognitive abilities.

1. はじめに

我々が言語を話すということは、ごく自然なこととして捉えられがちである。しかしながら、幼い子供が初めて言語を獲得する際には、本人からすればさまざまな困難に直面することとなり、必然的に周囲とのミスコミュニケーションが生じ、そして、言葉を伝えることができない苛立ちや混乱が起こり、大きなストレスを抱えることになる。しかし同時に、言葉が伝わることの面白さ、楽しさを経験し、今までジェスチャーや'bubbling'「喃語」(なんご)に頼っていたいわば動物的なコミュニケーション方法が一変して、人間らしいやりとりを行えるようになるのである。

本研究は、ケーススタディとして、子供の初期の段階における言語を観察しながら、ど

のような要素が子供の言語発達と言語習得に深く関わっているのか、という点について考えてみたい。

2. 問題提起

2. 1 先行研究

Bonvillain (2003) は子供の言語習得について、次のように述べている。“Development of linguistic ability is linked to maturation of cognitive processes (242).” (子供が言語を獲得するためには、内面的な認知の能力が成熟していくことに関係がある)。

では、日本語話者に取り囲まれた環境で育った子供たちは、最初の語彙 'one-word utterance' が発生する際には、どのような認

* 観察報告としたのは、子供が獲得する語彙が日々増えていることと、被験者の数が限られていたことによる。

^{*1} 東京工芸大学工学部 基礎教育センター非常勤講師
2004年9月10日 受理

知能力が影響しているのだろうか。

さらに Bonvillain は次のように述べている。

Usually by the end of their first year, children begin to speak single words. These utterances are *holophrastic*; that is, each word expresses broad semantic and contextual meanings. Because earliest utterances are functionally complex, they can only be understood in the context of a child's experience (2003:244).

すなわち、子供が最初に話す単語は *holophrastic* (一つの単語でより広い意味を包括している) ものである。したがって、初期の段階の発話は、子供の体験をもとにしてようやく理解できるといったような状態であり、一つの語彙の中に多くの意味を含んでいる、というのである。

それでは日本語の場合はどうであろうか。本研究ではこの点に着目して考えていきたい。

2. 2 問題提起

上記の研究結果をふまえて、次の二つの点を仮説とし、調査を行うこととした。すなわち、1) 日本語話者における子供の語彙発生の順序として、品詞の分類としては名詞が最も早く、また種類も多い。次に、2) 語彙のジャンルを比べてみると、食物に関する語彙が最も豊富である。そして、これらの二種類の語彙を活用することによって、一つの単語で、さまざまな意味をあらわしているのではないかと考えた。

まず、仮説1) についてだが、日本語において名詞は、‘propositional content’ (命題内容) を含むものであるため、この一語を発話するだけで会話が成り立つ可能性が高い。そのため、子供の発語に多くあらわれることが考えられる。

次に、仮説2) についてだが、子供に影響

を与えるものの中で、食欲が最も基本的な欲求の一つであるため、食物に関する語彙の発生率が最も高いのではないかと考えた。

さらに、一語でさまざまな意味を示す点については、実際にデータを見ていくこととする。

3. 調査および結果

3. 1 データ

調査を行うにあたり、以下のデータを用いた。対象となったのは、1歳10ヶ月男児、1歳11ヶ月女児、2歳0ヶ月男児の3名の発語を、母親の助けを借りて、できるだけ多く収集し、分析を行った。^{*3}

3名の子供は、生まれてから現在まで、ほぼ同じような環境のもとで生活をしている。すなわち、両親は20代後半から30代前半というほぼ同年代であり、父親は東京都内の同じ会社に勤めている。そのため、全員が都内の同じ社宅に住んでいる。また、社宅の敷地内には公園があり、子供たちはそこでほぼ毎日一緒に遊んでいるため、親同士は頻繁に顔を合わせている。もちろん、子供同士も、仲の良い遊び相手となっている。

先行研究にもある通り、子供は1歳が終わる頃から意味のある単語、すなわち「一語発話」 ‘one-word utterance’ が発語としてあらわれるようになる。今回の調査では、データの収集は、子供同士が遊んでいる場面において著者が観察を行い、また、家に帰ってからは母親による発語を書きとめてもらうことで、合計149の語彙を収集することができた。尚、3名が発話できる語彙の内容として、重複する語彙は一つにまとめた。

3. 2 結果

3. 2. 1 幼児の語彙の発生とその種類について

^{*3} 調査にはテープ録音も行ったが、まだ文字化を行うほどの会話が成り立っていないため、今回は割愛する。

被験者の語彙をまとめてみると、以下のようになった。表1は、幼児の言語にどのような品詞の種類があるのかをまとめたものである。

表1にあるように、語彙の合計は149あった。そのうち、名詞の割合が最も高く、103単語あり、全体の約70%を占めていることがわかった。次に動詞の割合が高く、22単語（15%）となっていた。次いで、形容詞の割合が9単語（6%）であった。

その他の品詞の中には儀礼的な挨拶「はよー（おはよう）」「あっとう（ありがとう）」や、感嘆詞「あやや（おや）」「じゃじゃーん」等が含まれている。「意味不明」として分類されたものは、「みも」「にやむ」等といった、子供が好んでよく発話しているものの、周りの者にはその本当の意味が理解できない単語を示している。

表1: 幼児の語彙の種類と割合

品詞	数	割合
名詞	103	(69%)
形容詞	9	(6%)
動詞	22	(15%)
助詞	3	(2%)
その他	8	(5%)
意味不明	4	(3%)
合計	149	(100%)

以下にあげる図1は、表1の内容をグラフにあらわしたものである。ここでわかることは、名詞、形容詞、動詞といった、発生率の高い品詞をあわせてみると、これらの品詞は発話された語彙全体の90%に達しているということである。ここで明らかになったことは、やはり品詞の中では名詞の割合がもっとも高かったということである。

ただ、予想に反して形容詞よりも動詞の方

が品詞の割合が高かった。これは、子供の表現方法の特徴と関係があるように思える。すなわち、自分の意思を示す際に、子供は大人のようにものごとの状態を示そうとはせずに、より直接的にものごとを述べる機会が多いことが影響を与えているのかもしれない。

図1：幼児の語彙における品詞とその割合

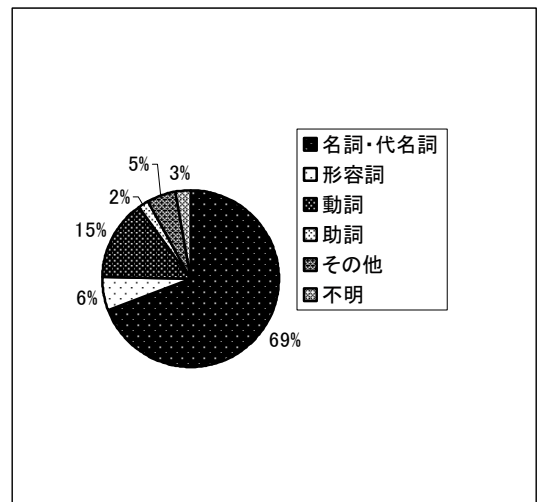


図1で明らかなように、この時期の月齢の子供にとって、挨拶はさほど重要視されていないということである。単語を主に発音する子供にとって、あいさつ表現は長くて発音が難しいし、また、この時期の子供たちは、見知らぬ人との出会いや別れが少ないため、日常的に接している親に対しては、改まって「ありがとうございます」や「こんにちは」といった挨拶自体を行うことが少ないということも考えられる。

挨拶を発する代わりに、言葉を使わずにジェスチャーを用いる方法は、視覚的に大人に理解されることが多く、非常に有効な手段である。例えば、手を振って「バイバイ」をあらわすことは、もっと月齢が低い時期から行

われているし、おじぎをする（お礼を述べる）という行動も最近は見られるようになってきている。

3. 2. 2 幼児の語彙の発生とその種類について

次に、幼児の一語発話の中で、どのようなジャンルの単語の発生率が高いのかをまとめた。表2は、幼児の語彙をジャンル別にまとめたものである。尚、ここでは助詞と意味不明の語彙（7単語）を考慮に入れていないため、合計数が減った結果となっている。

表2: 幼児の語彙のジャンルとその割合

ジャンル	数	割合
食べ物	35	(25%)
遊び	77	(53%)
身体	11	(8%)
挨拶	4	(3%)
その他	15	(11%)
合計	142	(100%)

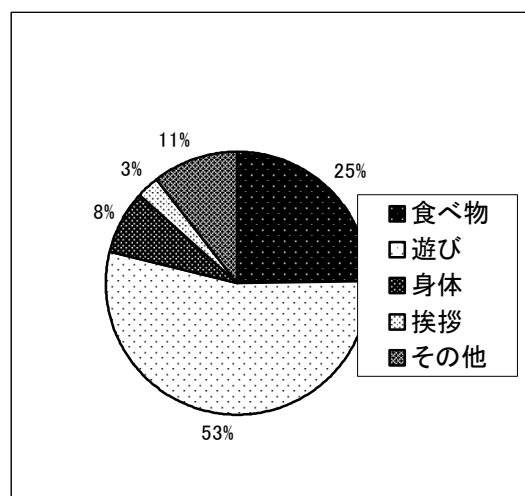
表2でわかることは、食物に関する語彙が35単語（25%）であったのに対し、遊びに関する語彙が77単語（53%）となっており、予想に反して遊びに関する語彙の割合が高いということがわかった。

次の図2は、表1の結果を円グラフにまとめたものである。ジャンル別に見ると、遊びに関する語彙が全体の半数に達しており、子供の一日の会話に登場する単語の中で、2回に1度が遊びに関連した単語であることがわかる。次いで、食物に関する単語が全体の4分の1に相当している。幼児が要求すること

の多くは、遊んで欲しい場合の要求か、空腹の際、そして喉がかわいた際の要求に集中していることがわかる。

またこの時期は、自分と大人の身体の違いが違ふこと（例えば、手や指の大きさなど）や、自分と身の回りの物（例えば昆虫など）のサイズの違いにも関心を持ち始めており、それらを表現する語彙が形容詞（例えば、「ちっちゃー（小さい）」「おっちゃん（大きい）」）であらわされていた。

図2：幼児の語彙のジャンルとその割合



3. 3 幼児の単語使用の包括性について

それではここで、具体的に幼児の単語がどのような機能的特徴があるのか、という点について述べていきたい。Bonvillain が述べているように、幼児における初期の段階の発話は、一単語のみであるわけだから、その単語は必然的に複数の機能をあわせ持っていることがわかる。例えば、「パパ」という一つの発話に関しても、1) その人そのものをさす、2)

「パパ」+指差し：指差す方向にいる（例：玄関であれば外出を意味する）、3）「パパ？」+上向きのイントネーション：何かをお願いする、いるかないかの確認をする、4）「パパ」+「がっこ（抱っこ）」：パパに抱っこして欲しいと要求する、といった具合に、さまざまな用途に応じて使い分けていることがわかった。

また、単語そのものに多くの意味を持たせる以外にも、指示代名詞（ダイクシス：こっち、あっち）を駆使することによって、意味的機能を拡張させていることがわかった。例えば、「パパ」+「こっち」：パパにこっちに来て欲しい、パパにこっちのものを取って欲しい、パパにこっちに座って欲しい、パパにこっちのスプーンを使って欲しい、などの意味を示していることがわかった。

英語話者においては、子供は初期の段階ですでに、‘up’ ‘down’の区別ができていようである。自分を中心として対象物が上にあるか下にあるかという認識ができていのである。しかし日本語では、ダイクシスが先に発達し、自分を中心として対象物が近くにあるか遠くにあるかという認識が先にできるものである。また、上下の空間的な認知については、特に上の位置にあるものに対して、「あっち」という単語を意味拡張させていることがわかった。

4. 考察

それではなぜ、幼児の語彙の発生が上記のような結果になったのか、という点について考えていきたい。まず、幼児の語彙の中で、名詞が一番多く発生していたことについてだが、これは、名詞そのものが ‘propositional content’（一番言いたいこと）を示すことができるため、一語で言いたことが伝わるという利点を活用しているという性質上、名詞の発語が一番多かったことが考えられる。次に多い動詞についてだが、主語である「何が」という部分が欠けると、会話が通じない可能性

が高いため、動詞を単独で発語するにはジェスチャーが伴うことが多いことがわかった。例えば、「がっこ（抱っこ）」と言いながら両手を差し出したり、「かいい（痒い）」と言いながら痒い箇所を搔いたりするといった具合である。ジェスチャーは幼児の言語にとっては、なくてはならない存在であることがわかった。

また、名詞を見てみると、子供の言葉の特徴として、オノマトペ（擬音語、擬態語）が多いことに気が付く。例えば、「ピッカ（ライトが点滅するもの）」「ウーカンカン（消防車）」「ピーポー（パトカー）」「わんわん（犬）」「ブーン（ヘリコプター、飛行機）」「ジャー（シャワー）」「はーはーしーしー（歯磨き）」などがある。このようにオノマトペが数多くあらわれるのには、いくつかの理由が考えられる。まず初めに、オノマトペは発音が簡単で、周りの大人も実体が想像しやすいため、理解されることが多い。次に、名詞は擬態化しやすい品詞であるため、オノマトペとして発音されることが多い。そして最後に、大人が子供に言葉を教える際にも、子供がイメージしやすいように、オノマトペを使って話していることが多かった。こうした理由により、子供が言葉を発する際には、対象物を具体化する手段として、ジェスチャーとオノマトペを駆使していることがわかった。

次に、幼児の語彙の約半数が遊びに関するものであったことについて考えてみたい。幼児にとって食べることは大切な欲求だが、このことに関しては、例えば、「じゅちゅ（ジュース）」と言えば、「飲みたい」という内容が即座に相手伝わるため、それ以上の語彙を使う必要がなくなり、言語としての発達が遅れがちになるのではないだろうか。しかしながら、遊びに関する語彙は、自分の細やかな欲求を伝える必要があるため（例えば、人形を取って欲しい、置いて欲しい、片付けて欲しい、一緒に遊んで欲しい、並べて欲しいなど）、自然に語彙の発達をうながしているようである。

語彙の獲得について、今回新たな発見とな

ったのは、大人が第二言語を習得することとは異なる方法で、子供は新しい単語を習得していくということである。例えば、大人であれば「大きい、小さい」、「重い、軽い」といったように、一つのセットで覚えるような単語があるが、子供はそういった獲得方法は用いない。むしろ、イントネーション上で似た単語を覚えていくことが、語彙を増やす助けになっているようである。例えば、「あっちい（熱い）」の反対は「冷たい」であるが、「冷たい」という言葉はまだ言うことができない。また、「ばっちい（汚い）」は言えるが、「きれい」は言うことができない。その代わり、「おっちい（大きい）」「ちっちい（小さい）」「たっち（立つ）」というように、韻を踏む単語を次々と獲得していくのである。

認知の成熟に伴い、語彙の発達が見られるということに照らし合わせて考えてみると、描画の際にもそれがあらわれていることがわかる。最初は筆圧もなく、自分の意志とは無関係に点や線を描いていたものが、だんだんと殴り書きをするようになり、語彙が発生する前後ぐらいの時期から、たとえ描かれている絵がどう見ても横棒一本だとしても、具体的に何を書いているのかを言葉で示すようになってきた。例えば、「ばしゅ（バス）」「ぶつぶ（自動車）」などと言いながら、絵を描くようになる。そう言いながら描いているうちに、いつの間にか言われて見ると、描かれる絵も、何となくタイヤや長方形の箱のようなものを描いており、大人が見れば「バス」だということがわかるようになってくるのである。このように、認知の成熟度は、描画を見ることからもうかがい知ることができる。

5. おわりに

本調査では、幼児が初めて言語を習得する際に、どのような語彙がもっとも早く発達しているのか、という点に興味を持ち、分析を行った。その結果、名詞の発生が最も早く、且つ、ジャンルとしては、遊びに関する語彙

がもっとも多かった。これらが多かった理由としては、名詞が‘propositional content’（その単語だけで、言いたい事が伝わる）をあらわしているということと、子供の日常生活にとって、遊びがもっとも重要な地位を占めていたために、そのジャンルの単語が必然的に増えたということが考えられる。また、言葉の意味拡張により、一つの単語で二つ以上の意味を持つ場合があることが明らかになった。さらに、今回の観察報告では、子供が言語を獲得する際の手順として、発音の上で関連性のある単語を先に獲得していくことが明らかになった。

今まで子供の言語の習得と発達について、漠然と考えてきたこと、あるいは感じていた点が、ほんの少しではあるが明らかになったように思う。今回は観察報告のため、データの数も少ないが、今後はさらにデータの対象を増やし、一語発話の後には、どのような認知的、言語的な発達を伴うのかという点について、長期的に調査を行っていきたいと考えている。また、子供の言語習得には、周囲の環境の影響も大きいことが予想される。子供を取り巻く大人たちが、どのような言語行動で接しているのか、という点についても、今後考えていきたいと思っている。

最後に、本論文を執筆するにあたり、調査にご協力いただいた方々に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 2003. Bonvillain, Nancy. Language, Culture, and Communication – The Meaning of Messages, 4th ed. Prentice Hall: New Jersey.
- 2) 1997. Foley, William A. Anthropological Linguistics – An Introduction. Blackwell Publishers Inc: Massachusetts.